

おもちゃ図書館からの発信

おもちゃがつなぐ人と人

おもちゃの 図書館

育成ハンドブックNo.73

2010年12月発行

地域の中で...



地域の中で…

おもちゃ図書館は、ボランティア活動だからこそできる、生活に身近で、気軽に利用でき、相談でき、一緒に悩み、一緒に考えられる場所です。おもちゃ図書館ごとにやり方は違うけれど、子ども達のこころ豊かな生活を願っての活動は共通です。この育成ハンドブックNo.73は、おもちゃ図書館の役割を考える参考にして頂けると幸いです。

■ もくじ

もくじ	2
であいをつなかりに	
秋田県 秋田グリーンローズおもちゃライブラリー 片桐 貞子	3
地域におけるおもちゃの図書館の役割	
広島県 福山おもちゃ図書館 朝川 修子	8
福山市社会福祉協議会 ボランティアセンター長 鳥海 洋治	10
移動おもちゃ図書館	
千葉県 南三原おもちゃ図書館 福原 啓子	12
手づくりおもちゃ東西南北	
ポンポンヨーヨー さいたま市 おもちゃ図書館あ・そ・ぼ	14
情報スクラップ	
【「ぼくはうみがみたくなりました」DVD 紹介】【療育の窓冊子紹介】	15

表紙の絵	大原 梓さん
裏表紙の絵	(上) 狩野 志帆さん
	(下) 大原 和君さん
	宮崎県 西都市おもちゃライブラリー

であいをつなかりに

秋田県 秋田グリーンローズおもちゃライブラリー 片桐 貞子

[おもちゃ図書館の誕生]

昭和57年頃に、知人を通しておもちゃ図書館の存在とその活動をききました。幼児の療育にたずさわっているものとしては、つついがんばって何かを獲得させる事ばかりに目がいってしまっていて、子ども本来の自発的に遊びを楽しむ環境を忘れてしまっていた事に気づかされました。さっそく知人に相談をし、昭和58年6月に幼児の通園・相談施設である「ことば」の教室で月2回午後の時間に通園施設に通ってきている子ども達のためにと開きました。名称は社会福祉法人の名前をとって「グリーンローズおもちゃライブラリー」。運営はボランティアと職員です。オープン当初はおもちゃも少なく、つくって遊ぶコーナーを設け、毎回順番に担当しながら、子ども達や家族の方と一緒に簡単なおもちゃや折り紙、紙ヒコーキなどを作って楽しみました。

[地域に出会いを]

オープンして三年目からは幼児の利用しやすい午前中の時間帯にかえました。私達の施設は発達に配慮の必要な子ども達の通園施設ですが、同一敷地内には0才からの幼児保育園と3才から就学までの私立幼稚園があります。幼稚園は昭和32年に開園し、昭和40年すぎからコミュニケーションがうまくゆかず、地元の保育集団に受け入れてもらえない子どもが遠くから私達の幼稚園へ通ってきていました。その後、発達に配慮の必要な子ども達も多く入園するようになり、保育集団へ入る前の、または通いながらの支援という形で「ことば」の教室が幼稚園の中に設けられ、昭和47年に社会福祉法人としての「ことば」の教室が生まれま

した。子ども達はみんな、子ども同志のかかわりあいの中で育つ『共に育つ』の理念が根っこにあることを考えると通園施設の子どものみだけでなく、外に出て子ども同志で遊ぶ機会の少ない子ども達へと間口を広げる事が自然でした。

おもちゃもボランティアも少しずつ増え、つくって遊ぶコーナーではおもちゃや人に関心を示さない子どもが参加できにくい事に気づかされました。つくって遊ぶコーナーをやめ、ゆっくりと子どもとおもちゃを介して遊ぶ事を主にしました。七夕やクリスマス、ひなまつりの時に簡単なものを親子でつくり、毎月第三の開館時には、その月に生まれた子ども達の誕生会を開き現在もつづけております。ある月の誕生会の時に、口唇口蓋裂でくり返し入院手術を受けてきた子どもをもつ母親が、みんなから誕生をこんなに祝ってもらえるのは初めてだと涙をみせておられたのが印象深いエピソードでした。

[移動おもちゃライブラリー]

子ども達におもちゃや人との楽しい出会いをと市内外の公民館や児童館を借りて、年に数回移動おもちゃライブラリーを開きました。移動おもちゃライブラリーの場にも参加できない長期入院中の子ども達のもとへと、小児科病棟へも月に1回ですがはじめました。秋田でも4～5年前頃から総合病院に長期入院している子ども達の医療のみでなくこころのケアの大切さがクローズアップされ、保育士の方々が小児科病棟で活躍されたり、ボランティアの方々が子どもの笑顔を引き出してくれています。現在グリーンローズおもちゃライブラリーでは総合病院の小児科病棟の保育士さんと協力して、ベッドサイドまでおもちゃを運んで遊んだり、話し相手になったりしています。

[ひろがれおもちゃ図書館]

療育のため、子どもと一緒に通園していたお母さん達を中心になって、県内

5ヶ所におもちゃ図書館がオープンし、県北の療育通園施設でもスタッフの方が中心におもちゃ図書館をオープンしました。現在では中心になっていた家族の方々の子ども達が成人する等で作業所づくりの方向へ移っていったり、転居や家族の事情、施設の諸事情で6館中5館が閉館、休館になってしまいました。数家族の方々が中心の1館（横手市・童夢）と新しく二年前にオープンした1館（能代市・のしろおもちゃ図書館）と県内では3館が開館中です。横手市の「童夢」では中心になって活動している方々の子ども達は成人になっていますが、おもちゃ図書館でのあいを大切に、大きくなった子ども達の今後も見すえ、つながりを持ちつづけています。のしろおもちゃ図書館は保育施設の中でのオープンなので子育て中の家族にとっては心強い、居ごちのよいところとなつてつながって行くことでしょう。

[早期療育と子育て事情の変遷]

20数年前にグリーンローズおもちゃライブラリーが誕生した頃と比べると、出生後すぐに医療的なケアを受けている子ども達は、何らかの発達支援のレールが準備されつつあります。早期療育は支援の必要な乳幼児にとって、とても大切な事ですが、遠い療育機関に通うためや、家庭の事情で親が傷ついている家庭が多くなり、ゆっくりと家族の中で受けとめられ、地域の中で生活してゆく時間が少なくなっている様に感じられます。毎日のスケジュールが、熱心に支援に通うことだけに片寄ってしまい、子どもの成長にとって基礎となる、人とかかわって、受けとめられ共感しあう部分の育ちが忘れられがちになってしまっているのではと…。もちろん生命の維持管理のため家族が四六時中付添わなければいけない子どもも多くいます。早期療育にたずさわっている私達が一人の子どもとして心と身体の育ちを支援していくというスタンスを家族の方へ、伝えていないという責任も問われます。

乳幼児期に医療と直接的なかかわりが少なかった子どもの中にも発達がゆっくりであったり、とび出しやパニック、親になつかない、ことばが遅いなど、家族にとって育てにくいと感じられる子ども達があります。核家族での両親共働きや少子化で、乳児期から集団保育で育つ子どもやまわりに日中遊ぶ子どもがほとんどいない環境の子ども達も多くなりました。

1才半健診の時、医師や保健師が発達の気がかりなお子さんについて話し合い、保護者に受診する専門機関をすすめたりの助言をしています。でも子どもが小さい親にとっては、もう少し様子をと専門機関受診のハードルが高すぎるケースに出会うことが少なくありません。

就学前の子どもをもつ母親達が子育てや親同志のコミュニケーションをと、育児サークルを仲間と一緒に立ち上げています。また、保育園、幼稚園の場で未就園の子どもと親のつどえる場を設けることが多くなっています。しかし人への関心が乏しく、パニックを起こしたり、他の子を攻撃したりする子をもつ親は、遊びの場にてかけにくくなりがちで、親のイライラと育児不安、悩みはますます子ども達から笑顔を忘れさせています。

[地域の中で子育て支援の場として]

私達通園施設の職員は一昨年から月に2回ですが1才半健診の場に参加し、子どものコミュニケーション相談の場を作っています。気になる子ども達には保健師の方々と連絡をとりあっておもちゃライブラリーに誘っております。他の子の遊びをみたり、ボランティアや職員との遊びを通して人やおもちゃにも目をむけたりもしてくれています。一緒に参加している家族の方々も回数を重ねて遊びにきて下さる事で悩んでいる子育てについて口に出して話してくれたり、専門機関に相談する事にも、抵抗感が少なくなったりもしてきます。

行けば子どもと家族を迎えてくれる同じ人がいる（ボランティア・職員）事も

安心感を持つ一つだと思われます。泣きやまない子を見守ってくれる大人、発達に配慮が必要な子どものきょうだいとじっくり一対一で相手になって遊んでくれる大人、自分で選べる楽しいおもちゃの存在。

おもちゃ図書館に遊びにきてくれる子ども達の中で毎回4～5人が配慮の必要な子ども達です。

[おもちゃ図書館のこれから]

グリーンローズおもちゃライブラリーは現在どちらかというとな就園前の子どもが中心です。専門の療育機関に通いはじめた子ども達も日程が合えば遊びにきてくれますが、通園回数が多くなると足が遠のきます。ウィークデーの午前中なので…。定期的に通園したりする機関や保育施設で職員や他の親の方々と相談や悩みなどできるつながりがあれば安心です。遊びにくる子ども達は流動的ですが、大きくなってもフラリと立ち寄れたり、家族にとっても幼児期と違った悩みも出てきているので、土曜日の午後など月1回でも出あえる場所が開かれていると、様々な発信もできるのかなあと考えたりしています。

ボランティアの方々と一緒に地域の中で、おもちゃを介して人と楽しくかかわって行ける場、配慮の必要な子どもも安心できる遊びの場、親にとっても子育て仲間がいて、つながって行ける場として欲ばらずに、つづけて行ければ…と一願っております。



地域におけるおもちゃ図書館の役割

広島県 福山おもちゃ図書館 朝川 修子

1. 福山市におもちゃ図書館誕生

福山市におもちゃ図書館が生まれたのは1994年6月24日です。助成の申請をし、おもちゃが届いてから3ヶ月後のことでした。

福山手をつなぐ親の会の中に設置が決まり、先に始めていた神辺おもちゃ図書館ぴよんぴよんの渡辺さんから開館にむけて研修を受けました。会場は福山市社会福祉会館5階の大会議室です。受付の机やマットを敷いておもちゃを机の上に並べて準備完了。ボランティアさんはピンクのエプロンをつけました。お母さんと一緒に開館を待つこども達が集って来ていました。あっという間に楽しい2時間が過ぎてゆきました。

2. おもちゃ図書館との出会い

私がおもちゃ図書館と出会ったのは、1990年の手をつなぐ親の会の総会に講師で来られた尾道市社会福祉協議会、松井さんからの紹介でした。初めて耳にしたお話にたちまち惹きつけられました。ちょうどその頃、所属をしていた「にこにこ学習会」のメンバーと早速に尾道市社協を訪問しました。尾道市ではおもちゃの図書館が運営されていて、部屋の中にはネットにいれられたおも



ちゃが壁にも棚の中にもいっぱい溢れていて、そこは夢の中のおもちゃの国のようでした。すぐに学習会で検討をはじめたところ、今の活動は社会生活に向けて取り組んでいるのだから、おもちゃで遊ぶことまで取り入れられない、との結論に至り、学習会でのおもちゃ図書館を断念しました。それでもどうしても諦めきれずに、当時、メンバーの中で最年少のこどもさんがいた渡辺さんに託しました。それから、4年間で過ぎて、親の会の役が外れたことで余裕ができ、おもちゃ図書館に再チャレンジしよう一念発起をしました。どうして、それほどまでにおもちゃ図書館に魅力を感じたのでしょうか？ よくはわからないのですが、もしかしたら新しい福祉の在り方を見ていたのかもしれませんが。それともうひとつ、親の会で先輩の方からのお

話を聞く機会がありました。当時、お子さんが養護学校の高等部に在籍しているお母さんが涙ながらに語っておられた中に、『デパートのおもちゃ売り場に行くと、子どもは楽しそうにおもちゃを手に取り、身体は大きくても興味のある物は小さい子むけの物で、回りの親子の目が冷たく思えてとても辛かった』とありました。私の息子は中学生でしたが人事とは思えませんでした。障害をもっていても遊びたいことにかわりない。自由に楽しく、好きな物で好きなだけ遊べる環境があればいいのにと考えたものでした。そう、おもちゃ図書館なら叶うと思いました。

3. 常設できる場を求めて

1995年福山市社会福祉会館の中にあった障害児通園施設の跡におもちゃ図書館を常設館として認可して欲しいとお願いをしました。同じ頃、障害をもっている親子で活動をしていた他の6グループとも協力して、福山市に対して正式に要望書を連名で提出しました。しかし、老朽化のためここでの常設はかないませんでした。

1998年福山市が社会福祉会館を健康福祉総合センターに新設するにともない、思いもかけず、念願の常設館が実現することになりました。

2000年6月にオープンし、2階におもちゃ図書館が常設されました。当初は小さな子どもと親や祖父母の利用が多く1日に100名位にもなり、整理券を発行したり、時間制限をしたりと大変な人気でした。障害をもつ人たちにとれば、それではあまりに過ごしにくい状況になってしまい、週の中で障害をもつ人たちだけが利用できる日を設定しました。半年が過ぎる頃には落ち着いてきて現在では1日20人位が利用しています。保護者からこんなにたくさんのおもちゃがあって、ゆっくり親子で遊べるのがうれしいという声も届いています。

4. 終わりにあたって

おもちゃ図書館にはたくさん子ども達が集まってきます。その中には知的、身体的、自閉的、発達障害、または重複した障害をもった子ども達もいます。どの親子にしても育てて行く中でいろんな問題にぶつかり、悩み、苦しみ、もがき、何かを取捨選択し、切磋琢磨しながら成長の道を歩いていきます。道はひとつではなくいくつもあります。ただ、その誰もが豊かで幸福な社会の中で生き活きと楽しく、自分らしく生活できることを目指していると思うのです。その一番近いところにあるのがおもちゃ図書館なのだと思ってきました。

福山おもちゃ図書館は、社会福祉協議会で管理をして頂いています。次に、「福山おもちゃ図書館の取り組み」を直接報告して頂きます。

○福山おもちゃ図書館の取り組み

福山市社会福祉協議会 ボランティアセンター長 鳥海 洋治

福山市社会福祉協議会は、朝川修子さんが代表で運営する「福山おもちゃ図書館」と関わり、障害のある子どもを持つ家庭のさまざまなニーズを把握することができました。そのニーズを解決するための事業をボランティアの力を借りながら展開してきました。

一つが「障害のある小学生のためのサマー・スクール」です。夏休みになるとたくさん障害のある子どもとその保護者が「おもちゃ図書館」にやってきます。日によっては順番待ちの状態もありました。理由を探ると夏休み期間中の障害のある子ども、特に小学生の「居場所」や「行き場」が少なく家に閉じこもりがちになること、そのために苦労されている保護者が多いこと、などがわかりました。

そこで、「子どもたちには夏休みの楽しい思い出を、保護者にはホッと一息つける休息の時間を」を目的に中学生・高校生・大学生等の学生ボランティアの力を借りて、プールやクッキング、自由遊びなどをして過ごす「サマー・スクール」を開始しました。2003年のことです。

この事業に対して「こうした事業を待っていた」「子どもがまた行きたい、といっている」「学生ボランティアのみなさんに心から感謝したい」などの保護者からの感想が届き、好意的に受入れていただきました。

毎年、約100人（延べ300人）の子どもたちが参加し、約200人（延べ400人）の学生ボランティアの協力が得られています。また、2009年から教育委員会の理解により特別支援学級の介助員の先生の参加が得られるようになりました。

もう一つが「おもちゃサロン」（移動おもちゃ図書館）です。「おもちゃ図書館に行きたくても遠くて行かない」などの声に応えるために、地区社協の関係者・民生委員・地域のボランティア等へ働きかけ、地域の公民館や集会所、幼稚園の空き教室などで開催がされるようになりました。参考にさせていただいたのは東京都荒

川区社会福祉協議会の取り組みです。

2009年度末で福山市内78小学校区の内、48の学区で1ヶ月に1回開催をされています。基本的なスタイルは「おもちゃで自由に遊ぶ」ですが、おやつづくりを取り入れたり、地域で活動する読み聞かせのグループや人形劇のグループに協力をいただき催しをしたりと地域の特性に応じたプログラムが展開されています。

このサロンに参加している子育て中の保護者とその子どもや「気になる子」を抱えた保護者から「気軽に参加できて色々な保護者と交流ができる」「わが子の障害をなかなか受入れられなかったが、同じような気持ちをもった方と交流ができて安心をした」などの感想をいただきました。

運営するボランティア側からも「プログラムに頭を悩ませることがないので運営しやすい」「地域で子育て支援や療育支援に力をいれたいと考えていたときだったのでよかった」などの感想をいただきました。

「サマー・スクール」は障害のある小学生が対象です。中学生になると「サマー・スクール」へ来ることはできません。でも「行き場が少ない」「集まる場が少ない」というニーズは中学生以上も変わりありません。

2008年6月から短大生のボランティアの協力を得て、発達に何らかの課題のある中学生以上のサロン「てらこや」を開設しました。月に1回集まり、テレビゲーム（任天堂ゲームWii）やオセロ、漫画、ホットプレートを使ったおやつづくりなどで好きな時間に来てゆっくり過ごせる場をつくることができました。

野外活動や夜店などへの散策の企画ものも少しずつ取り入れ、参加者も当初10人未満だったものが、現在では25人を超し、登録者も68人となりました。

発達に障害があり、それ故に普通学校に适应できず、家に閉じこもっていた中学生が、この「てらこや」で学生ボランティアと交流をするうちに勇気づけられ、再び学校へ通えるようになったという事例にも出会うことができました。



移動おもちゃ図書館

千葉県 南三原おもちゃ図書館 福原 啓子

南房総市にある「南三原おもちゃ図書館」は、平成8年4月にオープンしました。マスコミを通じて地域の方や千葉県内の方から家庭で眠っているおもちゃを寄付していただき、地元の南三原小学校・社会福祉協議会・教育委員会他、多くの方のご支援やご協力により生まれたおもちゃ図書館です。

そのスタッフには、息子の同級生のお母さん方で育児経験豊かな主婦・保健師・小学校教諭・薬剤師・保育士・学生と様々な職種の子ども大好き仲間が参加してくれました。

それから数年が経ち、おもちゃ図書館が軌道に乗った頃、あるお母さんの一言から、「移動おもちゃ図書館」のアイデアがひらめきました。

それは自閉症のお子さんをもったお母さんから、「地域の人に自閉症の事を理解して欲しい。自分ももっと自閉症について知りたいので研修会を開きたい。でも、子どもを見てくれる人がいない。どうしたらいいかしら。」と相談を受けました。

思いついたのは、私が勤務する心身障害児通所事業のつながりで親しくなったボランティアな気持ちを持っている特別支援学校教諭・館山聾学校の幼稚部教諭・保育士さんなどの存在でした。知識や経験が豊かな専門職ボランティアなのです。自閉症の研修会場の隣に『移動おもちゃ図書館』を開館しその運営スタッフには専門職ボランティアをお願いをして、子供達を預ってもらったらどうか。その間、親御さん達は、安心して研修会に参加できるのでは…。

そうして実現した『移動おもちゃ図書館』の初日、大勢の専門職ボランティアや地域の皆さんがスタッフとして気持ちよく参加してくれました。3時間ほどでしたが、スタッフも子ども達も楽しく過ごせ、研修会に参加したお母さんから、「今日は、集中して講師の話聞く事が出来ました。ありがとうございました。」との感謝の言葉に、スタッフ一同で開館してよかったと喜び合いました。

その後も、文化ホールでの市民向けの映画会で隣に開館したり、障害を持った人

が仕事をし、納税したいと言うことを啓発するチャレンジ大会の際にも開館しました。

チャレンジ大会に参加した親御さんからは、「子どもが大きくなって就労することに不安をもっていた。今回は、子どもを預けてゆっくりと参加できたので、いろいろな情報を聞くことができ、子どもの将来のことも見通しがもてた。」と笑顔で子どもを迎えにきました。移動おもちゃ図書館は地域の役にたっていると自負しました。

しかし、ここで心配なのは移動おもちゃ図書館開館中での事故ですが、幸い社会福祉協議会に負担してもらい、ボランティア保険に加入しているので安心して活動ができます。また、専門職ボランティアの皆さんに知識や経験をいかし安全対策に気を配ってもらっているので、子ども達は楽しく過ごすことができます。

ふとした思い付きが『移動おもちゃ図書館』として実現できたのも、本当に子ども達を思う人や専門家集団として協力してくれた「人と人とのつながり」があったからこそ。おもちゃ図書館を支えてくれている皆様に感謝です。

子どもは、一人ひとりかけがえの無いお子さんです。どの子も伸びる力を持っています。育て難さをもつお子さんを育児する親御さんに、お子さんの少しの成長の気付きを知らせ、楽しい時間を親子で共感できるように日頃努めています。子どもの笑顔は、お母さん方にとって活力であり、ボランティアの私達も元気パワーをもらいます。地域みんなで子ども達を育てています。つまり、おもちゃ図書館は、地域福祉を支えていると言っても過言ではありません。

これからも、お母さん方に寄り添い、お母さん方のニーズに対応していけるように「人と人とのつながり」を大切にし、みんなが地域でありのままに暮らしていけるように、おもちゃ図書館はお母さん方を応援していきます。

* 写真は、和田地域福祉まつりにおもちゃ図書館が参加している様子です。



手づくりおもちゃ東西南北



さいたま市 おもちゃ図書館あ・そ・ぼ 和賀 貴子

「おもちゃ図書館あ・そ・ぼ」は、毎月第2、3、4水曜日の10時30分から15時まで、大宮ふれあい福祉センターのプレイルームで開館しています。

スタッフは、主婦を中心としたボランティア6名。障がいのある子のほか、地域の親子さんと一緒に楽しく遊んでもらえるように配慮しています。その他、地域の障がい児団体におもちゃの貸出をしています。

【おもちゃ名】 ポンポンヨーヨー

【準備するもの】

- ・毛糸（極太）
- ・細めのカラーゴム（1個に付50cm位）
- ・フェルト少量
- ・ハサミ、ボンド



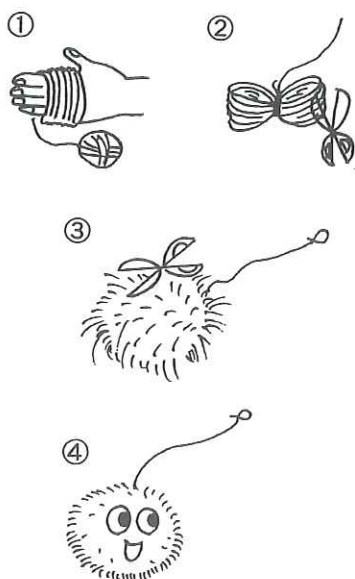
【つくり方】

- ①毛糸を手で100回位巻きつける。
- ②中心をカラーゴムできつくしばる。輪を切る。
- ③カラーゴムの端を指が入るように輪にする。直径7～8cmにまるく刈り込む。
- ④フェルトを切って目や口を作り、ボンドでつけてでき上り。

軽いからぶつかっても痛くない。

ピョンピョン色々な方向に飛んでいくのも楽しい。

ぐるぐるふりまわしても壁にぶらさげてビヨーンと引っ張ってもOK！！



■ 情報スクラップ ■ ■ ■ DVD & 冊子紹介 ■

〔DVD 紹介〕「ぼくはうみがみたくなりました」

自閉症の青年・淳一と、偶然出会った看護学生の明日美。2人は明日美の運転する車で海へと向かうこととなりますが…。旅先で出会った淳一の幼稚園時代の園長先生夫妻を通じ「自閉症とは」「障害があるとは」が語られ、明日美は少しずつ淳一を理解していきます。一方で、障害のある人が受け入れられていない社会や、家族の苦悩など、純粋や温かさだけではない厳しい現実も描かれています。

自閉症についてよく知らない一般の方にも、障害の理解をしていただくきっかけになる作品だと思います。2002年に小説発売、2009年に映画が完成しその後全国各地で上映、2010年11月17日にはDVDが発売されました。

『ぼくはうみがみたくなりました』

監督 福田是久 原作・脚本 山下久仁明

出演 大塚ちひろ 伊藤祐貴 秋野大作ほか

制作 「ぼくはうみがみたくなりました」制作実行委員会

DVD販売元 コロンビアミュージックエンタテイメント

<http://homepage2.nifty.com/bokuumi/>



〔冊子紹介〕「療育の窓」NO.154 2010年9月発行

『特集 子どものメンタルヘルスと障害』

「子どものメンタルヘルスと発達障害」では、障害のある子の中でも発達障害のある子の心と行動の問題について、その状況や介入、治療、予防的対応また地域での支援体制などについて紹介されています。ほかには作業療法支援、子どものアンガーマネジメント（感情が入り乱れ混沌とした心の状態を理解し調整する力）とSST（ソーシャルスキルトレーニング）、ペアレントトレーニング、家族支援といった内容がそれぞれの分野の専門家の方によって詳しく取り上げられています。

「障害」そのものへの理解や対応からさらに一步すすんで、障害によって引き起こされている本人や家族の「メンタル面」が不安定で、困難な状態であることを、理解し、支援することがいかに大切であるかを考えることができました。

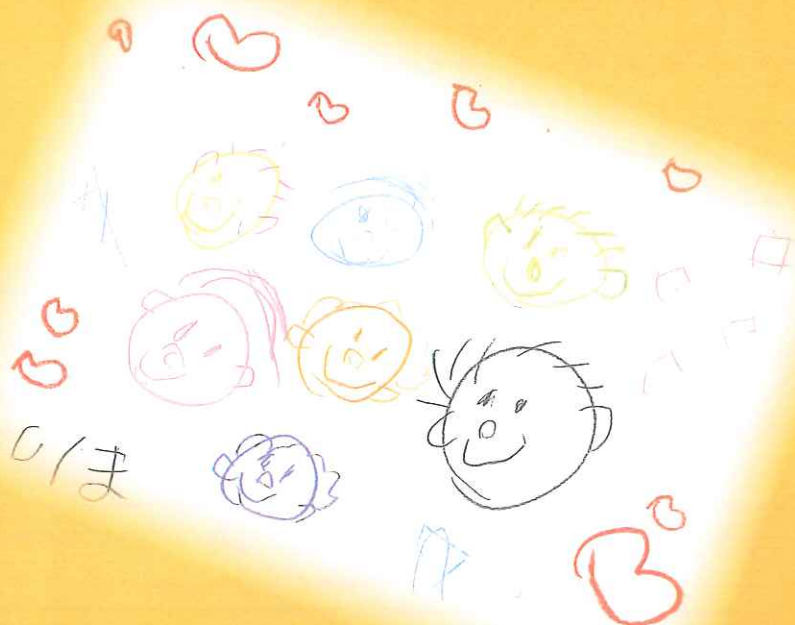
問い合わせ先

社会福祉 全国心身障害児福祉財団

〒162-0051 東京都新宿区西早稲田2-2-8

☎ (03)3203-1284 FAX (03)3208-1337

埼玉県 すてっぷおもちゃライブラリー 隅田 ひとみ



育成ハンドブック No.73

発行 財団法人 日本児童福祉協会
〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-10-503
編集 おもちゃの図書館全国連絡会
〒103-0028 東京都中央区八重洲1-6-2 八重洲1丁目ビル8階
電話 03 (3272) 0072 FAX 03 (5299) 9011
E-mail : renrakukai@toylib.or.jp URL : <http://www.toylib.or.jp>

※お問合せはおもちゃの図書館全国連絡会へお願いします。